学位論文要旨

遊び場面における幼児の仲間との関係調整の発達：
交代制ルールの産出とその主導者を中心に

広島大学大学院教育学研究科

学習開発専攻

藤田　文

目　次

第 1 章 問題と目的

第 2 章　幼児から小学生までを対象とした二者関係における関係調整の発達
－自由遊び場面における交代制ルールの産出－(研究 1)

第 3 章　交代制ルールに及ぼす遊具の資源量の影響からみた関係調整の発達
－ボーリングゲーム場面における幼児の交代制ルールの産出－(研究 2)

第 4 章　交代制ルールの産出と主導者の観点からみた関係調整の発達
第 1 節 魚釣りゲーム場面における幼児の二者関係の関係調整(研究 3)
第 2 節 魚釣りゲーム場面における幼児の三者関係の関係調整(研究 4)

第 5 章　交代制ルールの安定性からみた幼児の関係調整の発達
第 1 節 魚釣りゲーム場面における交代制ルールに及ぼす
ゲームの難易度の影響(研究 5)
第 2 節 お絵かき遊び場面における交代制ルールに及ぼす
交代のタイミングの不明確さの影響(研究 6)

第 6 章　総括－本研究の成果と今後の課題－

引用文献

第1章　問題と目的

遊びの中で仲間との関係調整を行う能力は，社会性の発達の１つの指標とみなされている（McLoyd, Thomas, & Warren, 1984)。また，現代社会では青年期のいじめ等の問題から,仲間関係における社会的能力への関心が高まっている。幼児期に仲間との関係調整の能力が欠如すると，青年期の社会的不適応のリスクとなることも示されている（前田，2001)。このリスクを軽減するためには,幼児期からの関係調整の発達の様相を明らかにする必要がある。

関係調整とは,「円滑な社会的相互作用を行うために,集団内の対人関係およびコミュニケーションに働きかける能力」と定義され,「関係重視」「関係維持」「葛藤への対処」の三要素で構成されているとされている(藤本・大坊，2007)。本研究では，この定義に基づき仲間との関係調整の発達を検討する。

従来，仲間との関係調整はいざこざ場面を中心に研究されてきた。いざこざの解決方略は，3 歳児までは「実力行使」「拒絶・拒否」等攻撃的で自分の意志を押し通す方略が多いが，4，5 歳児になると「依頼」「理由を聞く」等言語的に相手と交渉する方略に発達することが示されている（浅賀・三浦，2007)。

しかし，これらの研究は，関係調整が悪化したいざこざ場面の「葛藤への対処」のみに注目しており，奪われた遊具を奪い返すための一時的な関係調整しか取り扱っていなかった。つまり先行研究には，遊びの中に他者を取り込んで遊びを共有する「関係重視」や，遊具と同時に他者の行動にも注意を向けて他者と継続的に遊びを展開するための「関係維持」の要素が不足している。

そこで本研究では,「関係重視」や「関係維持」の要素を含む幼児の仲間との関係調整の発達を検討する。そのために，母子の関係調整の研究からその視点を考えていく。母子関係の研究では，母親が，母親と遊具の両方に子どもの注

意を向けさせるため，繰り返しのやり取りのルールを産出することが示されている（Bakeman & Adamson, 1984;吉田，2010)。つまり，規則的な行動のルールを産出する母親が足場かけとなり，子どもは共同注意の能力を獲得していく。しかし，仲間との関係調整では足場かけをしてくれる母親はいない。また，仲間の反応は不規則で予測不可能なものが多い。このような仲間との関係調整において足場かけとなるのは，規則的な行動のルールではないかと考えられる。

従って本研究では，ルールの産出が仲間との関係調整の足場かけになると仮定して，関係調整の発達を検討していく。社会的遊びが平行遊びから協同遊びへ発達することから考えると，産出されるルールは，遊具を平行的に使用する同時制ルールから遊具の共有度が高い交代制ルールへと発達すると予想される。

確かに同時制ルールでも関係調整はできるが、自分が遊びを実行する間に他者の行動に注意を向けられない。一方交代制ルールでは，順番を待つ間他者の行動に注意を向けることが可能になる。他者の行動をよく見ることで，他者を遊びに取り込み，他者との関係調整がより発展していくと考えられる。従って本研究では，同時制ルールから交代制ルールへの発達を確認した後，より関係調整の足場かけとなりうる交代制ルールの産出を中心に分析を行っていく。

また，仲間との関係調整をうまく行うためには，ルールを産出することに加えて，他者を配慮した上でそのルールを主導的に実行することが必要だと考えられる。従って，本研究では，ルールの主導者にも注目して検討を行う。

以上のことから本研究の目的は，遊び場面を設定し，幼児の仲間との関係調整の発達を,交代制ルールの産出とその主導者の観点から検討することである。加えて,「もの」（遊具）と「人」（他者）の要素を変化させる場面を設定し，ルール産出の難易度を変化させて,幼児の関係調整に関わる要因を明らかにする。

第2章　幼児から小学生までを対象とした二者関係における関係調整の発達

ー自由遊び場面における交代制ルールの産出ー（研究1）

目　的：４歳児から小学３年生までを対象に，どの程度交代制ルールを産出できるのか,また,ルールを主導する提案がどの程度出現するのかを検討する。

方　法：(1)*対象者*：４歳児 16 名，５歳児 10 名，小学１年生 20 名，２年生 10 名，３年生 10 名の計 66 名。(2)*遊具*：積み木８個，ビー玉 30 個，おはじき 30 個，木製かなづち１本。(3)*手続き*：対象者を同性・同年齢の二人組にして遊具を提示し自由に遊んでもらった。15 分間の遊びの様子をビデオ録画した。

結果と考察：（１）ルールの産出：幼児では自由度の高い遊具の場合，二人で一緒に遊ぶ明確なルールの産出が非常に少なかった。

（２）ルールの主導者：遊び開始時の行動パターンを分類し，ルールを提案して主導的に関係調整をするかを分析した（Fig. 1）。幼児では平行的な遊び「単独－単独」が多いが，４歳児から５歳児にかけて「提案－参加」が急増することが示された。

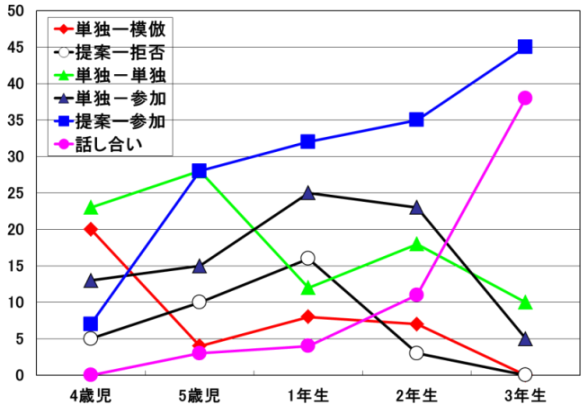

Fig. 1　他者との関係調整のパターンの出現率

以上の結果から，ルールは未熟だが提案が急増し，関係調整が発達する時期である４歳児から５歳児にかけて焦点を当てる必要があることが示された。

第3章　交代制ルールに及ぼす遊具の資源量の影響からみた関係調整の発達

ーボーリングゲーム場面における幼児の交代制ルールの産出ー（研究 2）

目　的：研究２では，ボーリング場面を設定して，遊具が限定されれば幼児がルールを産出できるかを検討する。また，遊具の量を二人に１個の場面と２

個の場面を設定し，産出ルールとの関連を検討することを目的とする。

方　法：(1)*対象者*：4 歳児 28 名，5 歳児 28 名の計 56 名。(2)*遊具*：ボーリングゲームのピン 10 本とボール 2 個。(3)*手続き*：対象者を同性・同年齢の二人組にして，ボーリングゲームで 7 分間遊んでもらいビデオ録画した。二人にボールが 1 個の少資源条件とボールが 2 個の多資源条件に，対象者を分けた。

結果と考察：二人の交互の投球が 2 回以上継続されれば，交代制ルールの産出ありとしてペアを分類した（Table 1）。対数－線形モデルによる分析を行った結果有意な傾向が見られ（u=.448, SE=.27, p<.10），5 歳児は条件に関わらず交代制ルールを産出し，4 歳児は少資源条件では交代制ルール，多資源条件では同時制ルールを産出する傾向が示された。

Table 1　投球順序に関する産出ルール(ペア数)

	4 歳児		5 歳児	
	少資源	多資源	少資源	多資源
交代制ルール	6	1	6	6
同時制ルール	1	6	1	1

この結果から遊具を限定すれば幼児でもルールを産出でき，多資源条件で 4 歳から 5 歳にかけて同時制ルールから交代制ルールへ発達することが示された。

第 4 章　交代制ルールの産出と主導者の観点からみた関係調整の発達

第 1 節　魚釣りゲーム場面における幼児の二者関係の関係調整（研究 3）

目　的：投げられたボールを取って交代するボーリングでは交代の主導者を分析できなかった。そこで研究 3 では，明確な交代の意志を伴って交代する，つまり遊具が実行の際に手から放れない魚釣りゲーム場面を設定し，交代制ルールの産出とその主導者を中心に 4 歳児と 5 歳児の年齢差と性差を検討する。

方　法：(1)*対象者*：4 歳児 54 名，5 歳児 50 名の計 104 名。(2)*遊具*：市販の魚釣りゲーム。魚は 8 匹。釣り竿は二人に 1 本。(3)*手続き*：対象者を同性・同年齢の二人組にして，魚釣りゲームで 10 分間遊んでもらい，ビデオ録画した。

結果と考察：（１）交代制ルールの産出：すべての交代行動を，魚が何匹釣れたら交代するか，釣れていなくても交代するかでその規準を分類した。各交代規準の出現割合について，交代規準ごとに年齢×性別の分散分析を行った（Table 2）。その結果，１匹交代で年齢の主効果（$F(1,45)=6.61$, $p<.05$）と年齢と性別の交互作用が有意で（$F(1,45)=4.06$, $p<.05$），１匹交代は４歳児よりも５歳児で多く，特に５歳女児で多いことが示された。

Table 2　二人組の魚釣り場面の年齢別・性別の交代規準

規準	4歳児		5歳児	
	男児	女児	男児	女児
一匹交代	26.1(26.2)	28.9(34.8)	33.8(30.3)	65.2(26.6)
全部交代	19.3(34.9)	17.6(33.5)	10.0(31.6)	2.4(8.9)
数匹交代	18.2(31.8)	5.4(7.8)	21.6(34.4)	11.0(15.9)
規準なし	28.2(24.3)	23.9(27.7)	26.2(17.8)	11.8(14.5)

注 1:数値は各タイプの１ペアあたりの平均出現割合。注 2:(　)内は標準偏差。

（２）交代制ルールの主導者：竿を持って魚を釣っている方を実行者，順番を待っている方を待機者とした。実行者から竿を渡す場合を実行者主導調整，待機者が竿を取り上げる場合を待機者主導調整とした。各出現割合について，主導者ごとに年齢×性別の分散分析を行った（Table 3）。その結果，全体的には待機者主導調整が多いが，実行者主導調整で，年齢と性別の交互作用に有意な傾向が見られ（$F(1,45)=2.98$, $p<.10$），実行者主導調整は５歳女児で多い傾向が示された。

Table 3 二人組の魚釣り場面の年齢別・性別の交代の主導者

主導者	4歳児		5歳児	
	男児	女児	男児	女児
実行者主導	28.9(27.8)	21.7(20.8)	16.3(20.9)	34.9(24.3)
待機者主導	54.8(35.8)	55.1(40.3)	69.3(28.6)	52.0(24.4)

注1:数値は各タイプの１ペアあたりの平均出現割合。注 2:(　)内は標準偏差。

（３）交代制ルールの規準といざこざの出現との関連：1 匹交代と規準なしについて，出現割合が高い半数のペアを高群，低い半数のペアを低群として，いざこざの出現の違いを検討した（Table 4）。いざこざ出現数について，規準ごとに年齢×性別×規準群の分散分析を行った。その結果，規準なしで規準群の

主効果が有意で（$F(1,41)=6.31$, $p<.05$），規準なしが多いペアはいざこざが多いことが明らかになった。

Table 4 二人組の魚釣り場面の年齢別・性別・規準群別の平均いざこざ回数

	4 歳児		5 歳児	
	男児	女児	男児	女児
1 匹交代高群	2.0(1.1)	2.0(0.5)	1.9(0.8)	2.0(1.1)
1 匹交代低群	3.1(1.3)	2.2(0.8)	2.8(0.8)	1.5(0.9)
規準なし高群	3.3(1.4)	2.3(5.1)	2.3(1.7)	2.3(5.3)
規準なし低群	1.8(0.9)	1.9(2.1)	2.4(6.6)	1.2(2.2)

注:（　）内は標準偏差。

以上の結果から，規準が明確な 1 匹交代は 5 歳児で多く，規準なしの交代が多いペアでいざこざが多いことから，関係調整には規準が明確な交代制ルールの産出が重要であることが示された。また，5 歳女児で 1 匹交代と実行者主導調整が多く，規準が明確で他者配慮のある関係調整は，女児の方が早く発達することが示唆された。

第 2 節　魚釣りゲーム場面における幼児の三者関係の関係調整（研究 4）

目　的：研究 4 では，三人組の魚釣りゲーム場面を設定し，二人組と同様に 4 歳児と 5 歳児の関係調整の年齢差と性差を検討することを目的とする。

方　法：(1)*対象者*：4 歳児 99 名，5 歳児 99 名の計 198 名。(2)*遊具*：研究 3 と同様の市販の魚釣りゲーム。(3)*手続き*：対象者を同性・同年齢の三人組にして，魚釣りゲームで 10 分間遊んでもらい，ビデオ録画した。

結果と考察：（１）交代制ルールの産出：すべての交代行動について研究 3 と同様に分析した（Table 5）。その結果，1 匹交代で年齢（$F(1,59)=4.73$, $p<.05$）と性別（$F(1,59)=4.26$, $p<.05$）の主効果が有意で，1 匹交代は 4 歳児よりも 5 歳児で多く，男児よりも女児で多いことが示された。また，数匹交代で年齢

Table 5　三人組の魚釣り場面の年齢別・性別の交代規準

規準	4 歳児		5 歳児	
	男児	女児	男児	女児
1 匹交代	33.7(32.9)	39.0(34.0)	39.9(35.9)	72.4(27.9)
全部交代	32.6(44.8)	14.8(35.1)	28.6(46.9)	6.3 (25.0)
数匹交代	10.8(18.6)	22.0(31.7)	6.5(17.1)	4.1(9.3)
規準なし	19.9(23.9)	19.6(20.2)	18.5(21.7)	11.1(13.6)

注:（ ）内は標準偏差。

（$F(1,59)=5.58$, $p<.05$）の主効果が有意で，数匹交代は 5 歳児よりも 4 歳児で多いことが示された。さらに，全部交代（$F(1,59)=4.24$, $p<.05$）で性別の主効果が有意で，全部交代は女児よりも男児で多いことが示された。

（２）交代制ルールの主導者：研究 3 と同様に分析を行った結果，実行者主導調整で年齢と性別の交互作用に有意な傾向がみられ（$F(1,59)=3.75$, $p<.10$），二人組の場合と同様に実行者主導調整は 5 歳女児で多い傾向が示された。

（３）交代制ルールの規準といざこざ出現との関連：研究 3 と同様に分析を行った結果，規準なしでは規準群の主効果が有意で（$F(1,58)=4.77$, $p<.05$），規準なしが多いペアは,少ないペアよりもいざこざが多いことが明らかになった。

（４）順番確認と交代の仲介：順番確認発言と仲介（待機者の一人が他の待機者に竿を渡す）について年齢×性別の分散分析を行った結果，両方とも性別の主効果が有意で(順番確認 $F(1,62)=12.75$, $p<.01$;仲介 $F(1,62)=11.38$, $p<.01$)，女児の方が男児よりも順番確認発言と仲介が有意に多いことが示された。

以上の結果から，二人組よりも年齢差と性差の有意差が多く見られ，三人組の関係調整でも規準が明確な交代制ルールが重要であることと，他者配慮のある関係調整は，女児の方が早く発達することがより明確に示された。

第 5 章　交代制ルールの安定性からみた幼児の関係調整の発達

第 1 節　魚釣りゲーム場面における交代制ルールに及ぼすゲームの難易度の影響(研究 5)

目　的：交代制ルールの安定性を検討するため，研究 5 ではゲームの難易度が交代制ルールの産出と主導者に及ぼす影響を検討することを目的とする。

方　法：(1)*対象者*：4 歳児 34 名，5 歳児 38 名の計 72 名。(2)*遊具*：市販の魚釣りゲーム。平易なゲームは，釣り糸が棒で揺れないため釣りやすく，困難なゲームは，釣り糸がひもで揺れるため釣りにくい。(3)*手続き*：対象者を同性・

同年齢の二人組にして，10 分間魚釣りゲームで遊んでもらい，ビデオ録画した。

結果と考察：すべての交代行動と交代の主導者といざこざの出現数について研究 3 と同様に分析した。その結果，規準なしで条件の主効果が有意で（$F(1,32)=5.77$, $p<.05$），平易条件よりも困難条件の方で有意に多かった。また，実行者主導調整で，条件の主効果に有意な傾向が見られ（$F(1,45)=2.96$, $p<.10$），困難条件よりも平易条件の方で多い傾向にあることが示された。いざこざの出現数については，条件の主効果が有意で（$F(1,31)=4.40$, $p<.05$），困難条件よりも平易条件の方で，いざこざが少ないことが明らかになった。

以上の結果から，4 歳児も 5 歳児もゲームの難易度に影響され，困難条件に比べて平易条件では，規準が明確な一匹交代のルールを産出し，実行者主導調整も多く，いざこざの出現数が少なく関係調整しやすいことが明らかになった。

第2節　お絵かき遊び場面における交代制ルールに及ぼす交代のタイミングの不明確さの影響（研究 6）

目　的：研究 6 では，交代の規準が外的に判断しにくいお絵かき遊び場面を設定し，交代制ルールの産出と主導者へ及ぼす影響を明らかにする。

方　法：(1) *対象者*：4 歳児 44 名，5 歳児 36 名の計 80 名。(2) *遊具*：市販の「スイスイお絵かき」を採用した。(3) *手続き*：対象者を同性・同年齢の二人組にして，10 分間お絵かき遊びで遊んでもらい，ビデオ録画した。

結果と考察：（１）交代制ルールの主導者：お絵かき遊びでは，交代の規準が外的に不明確なため，交代の主導者の観点から関係調整の分類を行った。各タイプの出現割合について，タイプ別に年齢×性別の分散分析を行った（Table 6）。実行者の描画中にペンを取り上げる他者配慮なし型待機者主導調整は年齢の主効果が有意で（$F(1,33)=5.47$, $p<.05$），5 歳児よりも 4 歳児の方が多かった。

Table 6 お絵かき遊び場面の年齢別・性別の交代の主導者

	4歳児		5歳児	
	男児	女児	男児	女児
実行者主導調整	63.6(19.9)	46.4(23.4)	56.5(28.2)	43.9(21.2)
言語的要求型待機者主導調整	6.6(7.1)	3.4(5.8)	3.9(3.9)	18.2(32.8)
他者モニター型待機者主導調整	9.4(11.7)	27.9(25.2)	27.9(31.7)	30.1(17.6)
他者配慮なし型待機者主導調整	19.5(17.4)	20.9(15.8)	10.7(9.9)	5.7(6.3)

注 1:数値は各ルールの 1 ペアあたりの平均出現割合　注 2:( )内は標準偏差。

（２）関係調整といざこざの関連：研究 3 と同様に分析した結果，他者配慮なし型待機者主導調整において主効果に有意差が見られ（$F(1,29)=8.79$, $p<.01$），他者配慮のない関係調整が多いといざこざが多く出現することが示された。

以上の結果から，お絵かき場面では，4 歳児では他者配慮のない待機者主導調整がみられ，その場合いざこざが多かった。外的規準が不明確な場面では，より他者の行動を見ることが関係調整にとって重要であることが示唆される。

第 6 章　総括－本研究の成果と今後の課題－

本研究によって，4 歳児から 5 歳児にかけて，同時制ルールから交代制ルールへ発達し，交代制ルールの規準が不明確なものから明確なものへ発達し，また他者へ提案したり，自分から遊具を渡したりするなど他者配慮的にルールを主導する関係調整ができるようになることが明らかになった。

さらに，交代制ルールの規準が明確な場合にいざこざが少ないことも示された。従って，規準が明確な交代制ルールが足場かけとなって，他者を遊びの中に取り込んで，遊具を継続的・安定的に共有することができること，つまり，関係重視と関係維持の側面からの関係調整が可能になることが示された。交代制ルールでは，次に誰が実行するかという他者の行動を予測することができ，また他者の行動を見るチャンスが増える。交代制ルールが産出されることで，他者の行動をよく見る機会の増加につながり，さらにルールに他者を取り込む

役割を果たし，他者との関係調整がうまく行われるようになると考えられる。

また，5歳児で関係調整の性差が大きくなり，5歳女児は，交代の規準が明確で他者配慮的に主導し，特に三者関係では順番確認や仲介など全体的に他者を配慮した関係調整ができることが示された。従来関係調整の性差については，男児は支配的で女児は友好的な会話スタイルであること（Leman, Ahmed, & Ozarow, 2005），対人交渉方略は女児の方が早く発達すること（山岸，1998；渡部，1995）が示されている。これは，対人関係重視の他者配慮的な行動を女児の方に求める性役割を意識したしつけの影響と解釈されており，本研究で見られた性差もこのような性役割に基づく社会化の影響は無視できないであろう。

本研究の知見から，保育場面において仲間との関係調整の能力を促進するために，交代制ルールを含むゲーム遊びを多く導入する必要性が示唆される。本研究では，さまざまな遊び場面を設定することで，幼児の関係調整には，遊具の自由度や資源量またゲームの困難度の要因が影響を及ぼすことが明らかになった。従って，交代制ルールの産出が未熟な幼児では，環境設定への配慮が必要であり，上記の要因が考慮された上で様々な遊具を体験すれば，社会性が未熟な4歳児でも他者との関係調整の練習をすることが可能になると考えられる。

従来の研究では，いざこざの葛藤解決という一時的な関係調整のみに焦点が当てられていたが，本研究ではルールの発達に注目し，仲間との良好な関係を重視し，遊びの中に他者を取り込み，遊具を継続して共有する関係重視や関係維持を含めた関係調整に焦点をあてた点に意義がある。規準が明確な交代制ルールが関係調整に果たす足場かけの役割を明らかにした点も新しい知見である。

今後は，交代制ルールの産出を促進する要因をさらに検討しながら，ゲーム遊びを保育現場に導入して，その効果を検証していく必要があるだろう。

引用文献

浅賀万里江・三浦香苗（2007）．集団保育場面における幼児のいざこざの意義に関する一考察――量的・質的分析の両面から―― 昭和女子大学生活心理研究所紀要, 10, 55-64.

Bakeman, R., & Adamson, L. B. (1984). Coordinating attention to people and objects in mother-infant and peer-infant interaction. *Child Development*, 55, 1278-1289.

藤本学・大坊郁夫（2007）．コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み パーソナリティー研究, 15, 347-361.

Leman, P. J., Ahmed, S., & Ozarow, L. (2005). Gender, gender relations, and the social dynamics of children's conversation. *Developmental Psychology*, 41, 64-74.

前田健一（2001）．子どもの仲間関係における社会的地位の持続性 北大路書房

McLoyd, V. C., Thomas, E. A. C., & Warren, D. (1984). The short-term dynamics of social organization in preschool triads. *Child Development*, 55, 1051-1070.

渡部玲二郎（1995）．仮想的対人葛藤場面における児童の対人交渉方略に関する研究――年齢，性，他者との相互作用，及び人気の効果―― 教育心理学研究, 43, 248-255.

山岸明子（1998）．小・中学生における対人交渉方略の発達及び適応感との関連――性差を中心に―― 教育心理学研究, 46, 163-172.

吉田直子（2010）．“共同注意”の発達的変化 その 2――「自他関係」の組織化に関する考察―― 中部大学現代教育学部紀要，2, 67-76.